



# 深い泉

@幸せな贈り物

## ブラウニー聞いて！

(訳注：自分が不利な状況に陥ればシベリアンハスキーの犬形であるブラウニーを探し、「ブラウニー聞いて！」と叫ぶテレビ番組に基づくことばです)

**象牙塔の伝説** 「象を冷蔵庫に入れる方法」という古いユーモアがあります。  
政治家は象に賄賂を送って冷蔵庫に入るようにさせる。  
警察は象を拷問して「鶏」という自白をさせたあと押し込む。  
数学者は象を微分して冷蔵庫に入れる。  
遺伝工学者は冷蔵庫に入る象を作って入れる。  
生物学者は試験管象を培養して入れる。  
位相数学者は象に冷蔵庫を食べさせたあと、象の口をひっくり返す。  
天文学者はブラックホールを冷蔵庫の中に入れて象を入れる。  
食品栄養学者は象に肥満がどれくらい怖い病気かを説得させてダイエットをするようにした後で入れる。  
ところで最近出てきたバージョンがあります。  
大学教授に象を冷蔵庫に入れろといえ、答えは「大学院生に調教にさせる」というものです。

最近、ソウル大学人権センターがソウル大学院生 1,380 人を対象に教授と大学院生の間に慣行的に成されている弊害を調べた結果 41.6%が教授の不十分な授業準備で学習研究権利を侵害されたと答えました。教授や先輩の論文を代筆したという場合が 16%あり、強制的に行事に動員されたと明らかにした場合も 28.1%になりました。さらには、出張に出た教授の家を訪ねて行って愛犬の餌を用意して、教授の引越荷物を運ぶかと思えば、教授の妻の飛行機チケットを予約購入して教授の子どもたちの宿題を見てやるなど、あらゆる雑務を処理したりもしました。

これはソウル大学だけの話でなく、他の大学でもよく起きることで、暴言、悪口、セクハラまで一、二度ではないと言われています。このような非常識な教授たちの良くない状態は、教授が論文通過と教授任用に対する権限を握っているだけでなく、同じ学問をする以上、その分野で一度嫌われれば、頼っていくのが大変な前近代的なシステムのためだと専門家たちは指摘します。

象牙の塔を越えて牛骨塔に、牛骨塔を越えて奴隷塔に変わっていきつつある教育の現場は、私たちの教育現実の徹底した「師匠と弟子」という美德を踏みこじってしまい、自分しか知らない利己主義の奴隷になっていきつつあるのではないのでしょうか。

教育が利益の手段になる限り、教育現場にはサラリーマンがいるだけで師匠と弟子はありません。

象牙塔は言葉どおり「伝説」であるだけです。

「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。」(エレミヤ 17:9) と明らかにしている聖書のみことばのように、貪欲の奴隷になっていっている教育現実をどのように回復することができるのでしょうか。

ここに道があります。

かつて東亜大のパク・キスン教授は「教育とは人間が人間を相手にして人間を作ることだ。神様を知っている人が神様を知らない人に行って神様を知る人にするのが教育学で、キリスト教教育学だ」と話しました。言い換えれば、まことの教育の開始は人間の根本を変えるところから始まるということです。

人間の根本に対して科学と知識がみな説明することができない事実を聖書は明らかにしています。

魚は水の中で生きて、木は根を土地におろして生きていくのが当然の原理のように、人間は神様とともにいてこそ幸せな霊的な存在として創造されたと語っています。

このような霊的存在である人間が、神様を離れてから貪欲の奴隷になって、すべての問題が始まり、呪いと災いと苦痛がやってくるようになりました。

お金がないので精神問題がくるのではありません。医者がいないので不治の病になるのでもありません。夜通し楽しむものにも心が何となく寂しくて安息がない理由は何でしょうか。

子どもの教育のためにすべてを投資してもがくのに、なぜ私たちの次世代はますます暴力と墮落に染まっていきつつあるのでしょうか。また、成功したのになぜ自殺の道を選択しなければならないのでしょうか。

教育が足りないからではありません。根本的な原因は、神様を離れているためです。

それゆえ、世の中で得ることができる平安と快楽は、いくら良くても少しの間だけで、瞬間的な満足であって、まことの幸せになることはありません。その後には必ず虚無と呪い、さらに大きな不幸が付いてくるようになっていきます。

それでは、なぜこういう不幸の中に生きていかなければならないのでしょうか。不幸をもたらす張本人がいるからです。

聖書はその名前をサタンあるいは悪魔、悪霊と言います。悪霊、あるいは惑わす霊と言います。サタンは人間が神様を知らないようにさせて、苦しませて、滅ぼします。それで神様はイエス・キリストをこの地に送って、人間が解決できない根本的な問題を解決して、救いの道を開いてくださったのです。

この地に来られたイエス・キリストは、人間の代わりに十字架で死んで復活されることによって、人間の罪と運命、呪いと災いの問題をすべて解決されました。(マルコ 10:45、ローマ 8:2) 信じる者ごとに永遠にともにいてくださる神様の子どもになる道を開いてくださいました。(ヨハネ 14:6、ヨハネ 1:12) まことの王として来られてサタンの権威を打ち砕き、その手から解放される道になってくださいました。(1ヨハネ 3:8、ヘブル 2:14~15)

聖書はイエス様を「キリスト」だと言っています。人間が絶対に解決できない根本問題を完全に解決された方ということです。今、この時間、イエス・キリストを私の救い主として信じて口で告白して受け入れる瞬間、神様の子どもになる祝福、本来の人間の祝福を回復するようになります。

イエス・キリスト、この方が私の人生の主人になるとき、はじめてまことの満足、まことの幸せがあなたの人生の中に席を占めるようになるのです。幸せな師匠が幸せな弟子を作り出す方法です。「**あなたは大切な人です。**」

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。

ここに、神の愛が私たちに示されたのです。(1ヨハネ 4:9)

# あなたの隣人に対し 偽りの証言をしてはならない

アフリカのことわざに「はやく行こうとするなら一人で行きなさい。しかし、遠くへ行こうとするなら共に行きなさい」ということがあります。私たちの社会は愛と激励よりは、非難と批判、争いにさらに習熟して「私たち」よりは「私」にさらに執着して生きていくようです。単純な利益のために親と子ども、隣人との間の殺人という殺伐な葛藤を見ればそうです。いつからか「隣」という単語は「恐ろしさ」の対象に変質していきつつあります。

神様を離れた以後、人間には3つの欲が訪ねてきたと聖書は明らかにしています。「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢…」(1ヨハネ2:16)このときから、人間は欲の奴隷になって、生涯をかけて誠意をこめた塔を一日で自ら押し倒す愚かな人間に転落するようになったのです。そして、その開始がまさに「嘘」でした。聖書に出てくる十戒の中の九戒は「あなたの隣人に対し偽りの証言をしてはならない」と警告しています。

嘘にも種類があります。自分のプライバシーのためにつく嘘、自分も知らないうちに人を害しようとするのではないのですが、いらぬ嘘について回る霊的な問題による嘘、さらに悪いのは隣を害しようとする嘘があります。

それでは嘘はなぜ問題になるのでしょうか。その根はいったいどこから始まったのでしょうか。

聖書の創世記3章を見れば、サタン(悪魔)から始まったことが分かります。それで、イエス様が嘘をつく者たちに向かって「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」(ヨハネ8:44)とされています。

ですから、悪魔の特徴は、嘘つき、だます者です。他人をだまして、結局、自分もだまされるのです。これを根にして出てきたのが嘘なので、この部分はかなり注意しなければなりません。自分をだまして、相手をだます人は結局は成功できないのです。それが霊的問題と悪魔の働きと関係あるということをつかえなければなりません。やみが光に打ち勝ったことはなく、偽りが真実に勝ったこともありません。それで、偽りがしばらく少しの間、勝利するようでも、実際には自分と隣に対して真実なほど有益です。

神様の答えを受ける人は特徴があります。事実に基づいた判断をします。客観的な判断をします。合理的な判断をします。その後、良心的な判断をします。最後に霊的な判断をします。こういう人はまちがいに勝つ勝利します。私が生かされれば隣が生かされて、隣が生かされれば私が生きるようになります。これがイエス・キリストを信じることによって神様とともにいる者の祝福です。

「そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」(マタイ22:37~40)

神様の子どもになる

## 受け入れの祈り

愛の父なる神様。私は罪人です。今まで神様を離れ、サタンの支配の下に縛られて、奴隷のように生きて来ました。しかし、今、この時間、イエス様を私の救い主、私の神様、私のキリストとして受け入れます。イエス・キリストは、神様に会う唯一の道であり、サタンの権威を打ち砕かれ、すべての罪とのろいと災いから私を解放してくださったキリストであると信じます。いま、私の中に入って来てくださり、私の主人になってください。今から私の生涯を細かく導いてください。イエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン

神様の子どもの

## 毎日の祈り

父なる神様、イエス・キリストによって神様がいつも私とともにおられて、導かれることを感謝します。今日も、すべての生活の中で、神様の子どもになった祝福を味わうように、聖霊で満たしてください。私の家庭と現場と行くところごとに福音を邪魔して困らせるすべてのサタンの勢力を権威あるイエス・キリストの御名で縛ってください。どんなこと、どんな問題でも、解決者であるイエス・キリストに任せて、その中で神様のより良い計画を発見しながら、聖霊に導かれる生活になりますように。そして、私の生活を通してイエス様がキリストであるということがあかしされ私の現場に神の国が臨むようにしてください。毎日、私の生活の中で神様の願いである世界福音化の契約を握って勝利できますように。今も私とともにおられるイエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン



イラスト\_カン・アラン

結婚を準備する人々は、ばくせんと時間を送ってはいけない。結婚できる若さの時間が長くないためだ。神様は、確かに伝道者としての私の人生を導いてくださる計画があると、自ら発見するように先に提示された〈結婚 ABC〉を几帳面に整理してみなければならない。たしかに神様は私たちを最も完全な祝福で世界の基の置かれる前に備えられた答えで、だれであっても導いておられる。したがって、だれでも与えられた人生は美しい。神様は世の中がますます苦痛に走って行って、危機がくるはずだと言われる。したがって、私たちは福音が与える自由の中で、神様の豊かさを味わう者として、幸せな結婚の出会いと祝福を期待しなければならない。したがって、欲張って、うぬぼれないで、過度に気をおとす弱さだけがないならば、私たちの生活は、神様の満ち満ちた豊かさを通じて明らかな答えを味わうようになる。それなら、私たちには3つの祈りが必要だ。マタイの福音書7章7節で案内されなければならない。

求めなさい-神様に祈りなさい。  
 神様が必ず備えておられる。  
 配偶者を求めて集中祈りをしなさい。  
 探しなさい-人を通して探しなさい。  
 たたきなさい-対象者が出てくれば確信を持って  
 たたきなさい。

ここで混乱しないように家庭を作る〈選択家庭 FAMILY〉として分別しなさい。ある人に何かといったところ FAMILY と言った。それはお父さん、お母さん、私はあなたを愛します。Father And Mother I Love You というものだ。とても素敵な表現だ。

**F - Forum** 契約で導かれる人は、互いにフォーラムが成り立たなければならない。福音で対話になるかをよく見てみなければならない。まことの疎通が

結婚の生活を価値あるようにさせる。話が通じないからだへの生活は、お互いを疲れさせるのだが、今、ほとんどすべての結婚家庭がそのように暮らしている。

**A - Assurance** 救いは神様の贈り物だ。したがって、祈ることができて聖霊の導きを受ける。赦された者として勝利する秘訣を味わう信徒の五つの確信を根拠としない結婚は、一生、家族すべてを苦痛の場でぐるぐる回るようにさせる。確信がない者とどのように人生の船と一緒に乗れるだろうか。

**M - Message** 私たちは契約を受けて契約を味わう生活を一生送らなければならない。それなら、今日働く聖霊の働きを確認して、導かれるメッセージの答えについて行く者でなければならない。メッセージの前に自分をたてる者であれば、お互いを確認できるようにしてくれる。

**I - Identity** アイデンティティは、個人の意味、出会いの意味、家庭の意味、生活の意味、時代の意味を分かるようにさせる。

**L - Love leadership** 家庭は愛が留まる現場だ。愛を作って維持して率いるリーダーシップが何より重要だ。

**Y - Yield** 人は弱い。したがって、相手の弱さを認めて喜んで譲歩できる配慮がすべての人を幸せにする。結婚は戦場でなく、戦場に隠されたオアシスであるためだ。譲歩するのは神様の働かれたことを見る重要な信仰だ。

結婚は若者のための重要な答えの現場であり、契約を成し遂げる家庭は神様の願いだ。考えを高めずに信仰の中心を持てば、一生神様の答えを確認しながら味わう家庭になるから、選択する場にいる人々の小さな案内版としてほしい。

チョン・ヒョングク (福音コラムニスト)

\* 相談したい方はこちらまでどうぞ